

彩菜栽

2018年
2月

次年度に向けた土作りについて

本格的な冬を迎え、家庭菜園は越冬野菜だけとなり、冬の休閑期に入り、空き畑が多くなります。この機会を捉え、しっかりと土作りし、次年度に備えましょう。

野菜の根が健全に伸びるためには、
(1)水はけと通気性が良いこと、
(2)水持ち(保水力)が良いことが重要な条件となります。

土には、細粒の粘土と細粒の砂の割合が異なる単粒構造と団粒構造があり、団粒構造にすると孔隙率が高く、空気や水を適度に含み根がよく伸びますが、その状態も数年間野菜を作り続けると、次第に痩せて単粒構造となり、根があまり伸びなくなってしまう。

土を団粒構成にするのには、良い粗大有機物の堆肥や緑肥、ピートモス、ココピートなどを十分に施し深く耕すことが必要です。

根が深く広く張るためには深層まで条件を整えることが大切です。その目安として、直径8〜9mmの棒を畑土に差したとき、あまり力を加えずに入る作土層が20cm以上あることです。力いっぱい差しこんで測る有効

土層が60cm以上あれば申し分ありません。一般にはこれでも不十分なことも多いですが、深耕することによりここまで改善することができます。

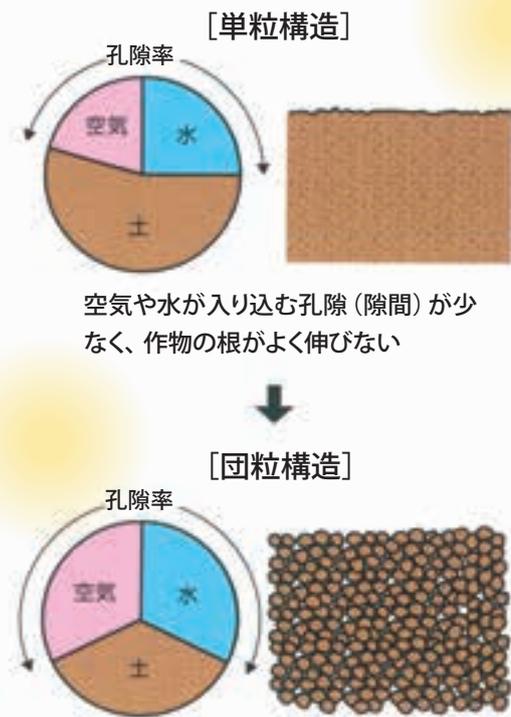
畑起こし、粗大有機物を入れる時期は寒冷の冬が一番です。それは他の作業が暇で、畑が空いているだけでなく、掘り起こした下層の土を上面に出し、厳しい寒気にさらし風化させることにより、物理性が改善され、病原菌や害虫、雑草の種子を死滅、軽減する効果が大きく発揮されるからです。

作業の手順は、前作の残りがすや病害虫の被害株、残根などをきれいに取り除き、堆肥などの粗大有機物

を畑全体にばらまいてから耕します。60cm以上も深耕する場合には先に畑を起こしてから次の耕うん時に粗大有機物を施すのが良法です。

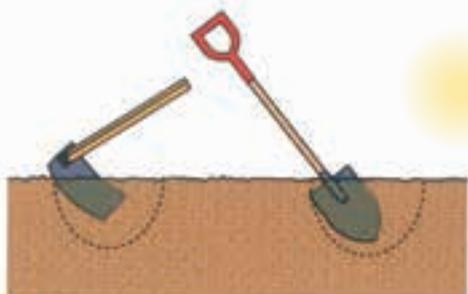
耕した畑土はなるべく表面に凸凹があるままにしておき、寒気に触れる面を大きくします。

土壌の酸性度も冬の間に調べ、pH 6.0〜6.5程度に調整しておくことが大切です。酸性を改良する消石灰の施用量は、砂質あるいは腐植の少ない土壌では少なく、黒ぼく土では多くを要するので、施用量を誤らないよう注意しましょう。毎年むやみに与え過ぎると弊害を生じる恐れがあります。



空気や水が入り込む孔隙(隙間)が少なく、作物の根がよく伸びない

団粒構造にすると空気や水を適当に含むことができ、作物はよく育つ



1〜2年に1回ぐらいは30cm以上深く耕す